

---

# けいおん！ Another Story SS

I,K

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けいおん！ Another Story SS

### 【Nコード】

N8918R

### 【作者名】

I / K

### 【あらすじ】

大変長らくお待たせ致しました！

この作品は、以前から企画していた『けいおん！ Another Story』の短編集です。

基本的にはストーリーとはあまり関係のない短編を掲載しますが、時にストーリーの補完となるエピソードを掲載する事もあります。

本編以上に不定期更新になるかもしれませんが、どうぞよろしくお

願  
い  
し  
ま  
す。

大切なもの、それは希望（前書き）

作中時系列：#26ラストシーンの直前

籠球編での剣臣の入院中の出来事についてのお話です。  
それでは、どうぞ！

## 大切なもの、それは希望

本日、十二月二十一日。あれから　そう。近藤たちとの一件があつてから、既にもう一ヶ月が経とうとしていた。

今の時刻は……だいたい十時位なんだろうか。これ、普段なら学校にいるような時間なんだろうけど　残念ながら、今いる場所は学校ではない。

それならば、ここは一体何処なのか？

答えは至って簡単、ここは病院だ。

そう。近藤たちとの一件で、俺は本当に殺されかけた。

なんでも主治医の話によると、どうやら一週間くらいずっと意識を失っていたらしい。

事実、俺もあの世界での出来事がなかったら

いや、あの天使みたいな女の子の前ではつきり『生きたい』と言つてなかったら　今頃、俺は間違いなく“この世”にはいなかったんだと思う。

……とまあそんな俺も、どうにか傷も完治したという事で、今日をもってやつと病院を退院する事になったって訳だ。

その病院の入口にある自動ドアが目の前で開かれると、そこから差し込んできたのは……まるで十二月とは思えないような、そんな暖かい日差しだった。

「どうだい、久し振りの外の空気は？」

ふと自分の後を歩いていた、今回の件の主治医に声を掛けられていた。

外の空気……そういえば、こうやってまともに外に出たのは久しぶりかもしれない。

けれども……

「久しぶり、でもないですよ」

けれども、俺が入院していたこの一ヶ月の間、一度もこの病院から外に出なかったって訳でもなかった。

「そうか？ でも、君に外出許可とかを出したような覚えは無いんだが……」

「そりゃあ外出はしてませんからね」

「ならいいんだが……一体どうしたんだ？」

「いや、ちよつとな」

俺は入院していた間に、一度だけ病院の外 といつても、敷地内にある中庭のような場所なんだけど に出ていた。

それは、この一ヶ月の間に何度もお見舞いに来てくれた姉貴や唯たちに連れられた訳ではない。

でも、たまたま外に出たという訳でもないと自分で思っている。

何故なら、それは……

あの二人と出会ったから、なんだろうからな 。

それは、俺の意識が戻ってから数日が経ったある日の事だった。

何もする事がない。

こんな身体じゃ、まだ何も出来やしない。

それに、何もする気が起きない。

あの頃 そう、警察やら学校やらの事情聴取を受け続けて疲れ果てていた頃の自分は、そうやってただ暇を持て余しているだけのまるで怠惰な時間を送っていた。

けどあの頃の俺でも、決してそれを良いとは思っていなかった。

……けれども、そこから知らぬ間に逃げ出してしまう。

そういう自分もまた、心の中にいた。そんな中、リハビリからの帰りに通った廊下で、俺はたまたまその二人に出会ったんだ。

……といっても、最初は

『いててて……わっ!』

『もう、走っちゃダメでしょ!? 危ないんだから……あっ、ごめんなさい』

いきなり男の子の方が俺に向かって突っ込んできただけ、なんだけどな。

……とまあ、いきなり俺の前に現れた二人は、見た感じ姉弟のようだった。

年は二人ともだいたい小学生くらいか。その辺はよく分からないが、その格好からして多分二人とも俺と同じようにここで入院しているのだろう。

『こら、陸斗りくとも謝いつて!』

『はいはい……ごめんなさい』

わざとじゃないとはいえ、隣にいるお姉さんらしき人に諭されて謝る陸斗君（多分弟か?）。

とまあ、そうこうしている内に

『それじゃあ、これで失礼します。ほら、陸斗も行くよ』

『言われなくても分かってるって!』

二人はあつという間に、そこから立ち去ってしまった。

『ま、いいか……』

そんな二人をふと一瞥して、俺もまた自分の病室へと歩き始めていた。

初めて会った時、あの二人の事はただの元気な姉弟だだけ思っていた。

何の偶然か、その後も何回かあの二人には会ったけど、初めて会った時と同じように、ただぶつかってしまったり とまあ、そん

な感じだった。だから、あまりお互いに話したりもしなかった。

けれども、あれから数日後

『おつ、兄ちゃんいたいた!』

『あの、突然お邪魔してごめんなさい』

まだ名前も知らないはずなのに、なんと二人は……

『何かの間違いじゃ、ないよな……』

俺の病室に、やって来ていた。

『何言ってるんだよ? オレらは兄ちゃんの所に来たんだけ? な、  
未来?』

『こら、そんな言い方じゃ失礼でしょ!? ほ、本当にごめんなさ

い……』

『い、いや……別にそれはいいんだけど。それより、一体俺に何の  
用だ?』

何だか俺の知らない所で話が勝手に進んでるような気がするけど  
……ともかく、俺はそんな二人にちよつと尋ねてみる事にした。

一体どうしたのか、と。

すると、返ってきた答えは……

『そ、それは……』

『に、兄ちゃんがちよつと元気なさそうだったからな。オレと未来  
とで何か出来ないかな、って思ってたさ』

『う、うん。それに、私たち……』

『あゝっ!! それ言っちゃダメだろ?』

『そ、そっか』

『とにかく、要はそういう事。何か他に聞きたい事はない?』

自分でもビックリするような、こんな答えだった。

元気なさそう……言われてみれば、実際そうなのかもしれない。

何もする気は起きないし、最近は自分でもあからさまに分かるく  
らい怠惰な生活を送ってるんだと思う。

それを、今初めてまともに言葉を交わしたこの二人に見抜かれて

るとは……情けないのかその逆なのか、とにかくどこか複雑な気分だった。

けれども……

『いいのか、俺なんかの為に』

『だから、いいんだって！ オレらにどーんと任せとけて！』

『う、うん！』

改めて考えてみると、ちょっとばかり嬉しかった。

『でも、オレらにはもう時間が無いんだ。オレらから兄ちゃんにはこれ”くらいしか出来ない。……だから悪いけど、明日の朝に病院のロビーに来てよ。見せたい物があるからさ』

『あ、ああ……』

『ぜ、絶対だからな！』

『もう、そんな風に言っちゃダメだよ……。ごめんなさい、でも見せたい物があるのは本当だから……。だから』

『分かったよ、二人とも』

何故かは分からない。けれども……

『……じゃあ明日の朝、ロビーでいいんだよな？』

いつの間にか、俺は二人にそう言っていた。

『ああ、約束だぜ！』

『それじゃあ、よろしくお願いします。陸斗、行こ？』

二人はそう言うとお互いに手を引かれ引きつつ俺の病室を出て行ってしまった。

『明日の朝、見せたい物がある……か』

そんな二人の出て行った後を見ながら、思わず呟いていた言葉。一体何を見せてくれるのか……心のどこかで、それを楽しみにしてる自分がいた。

そして、翌朝。

『おっ、兄ちゃん。来た来た！』

『おはようございます』

昨日二人に言われた通り、俺はこの病院のロビーへと足を運んでいた。……どうやら、少し待たせてしまったみたいだ。

『悪い、遅くなって』

『いいっていいって。ささ、こっちこっち』

陸斗君にそう言われ、俺は手を引かれるようにして何処かへと連れていかれた。

『そういえば……見せたい物って、一体何なんだ？』

『それは……見てのお楽しみです』

『ま、見りゃ分かるって！』

ここは病院の中。それにも関わらず、ロビーの中、長く続く廊下を駆け抜け、俺たち三人はひたすら“見せたい物”の元へと向かっていた。

そして、そうやって走ること数分。

『なあ、見せたい物って……』

『そう。これだぜ』

『綺麗でしょ？』

病院の裏口らしき場所から一步外に出る。

すると、開けたその視界に広がっていたのは……

『凄いな……これ』

今は十二月。なのに、青々とした葉が生い茂り、朝の光にさらされて輝いているように見える。そんな、まさにそこにあるのが“奇跡”と言えるような、堂々とした大木の姿だった。

それを見た瞬間、思わず俺は言葉を失っていた。

……凄い。何がどう凄いのかは言葉には出来ないけど、とにかく

その言葉一つしか浮かんで来なかった。

『……なあ、兄ちゃん』

そんな景色に見とれていると、右隣にいた陸斗君がふと声をあげていた。

『兄ちゃん、オレら……実は、兄ちゃんの事情、知ってたんだ。この間、兄ちゃんの身に何があったのか、全部知ってるんだ』

『だからね…… 私たちにも何か出来ないかな、って。 あなたの事を…… あなたがこの病院に入院している事を知ってから、ちよつと考  
えていたんです。 そしたら、その時に……』

『ちようど、この木の事を思い出したんだ』

それに続くように、未来ちゃんの方も声をあげていた。

…… そうか。 俺の事を知っていて、元気付けようとしていたのは  
そういう事だったのか。

『そうか…… 二人とも、本当にありがとな。 でも、なんで今日の朝  
じやなきや駄目なんだ？』

でも、それじゃあなんで『時間がない』なんて事を昨日言つてた  
のだろうか。

何故今日の朝じやなきや駄目なのか。

それを、聞いておきたかった。

そして、その答えは…… 意外な物だった。

『そ、それは……』

『私たち、実は今日でここから他の…… もっと大きな病院に移る事  
になってるんです。 私たち、実は双子なんですけど…… こうやって  
見た感じは元気に見えるかもしれませんが。 けれども、実は生まれて  
からずっと…… 大きな病気で、二人揃って入院しているんです』

…… そう、二人は生まれつき大きな病気を患っていた。

二人を治療するお金の為に、両親も共働き。 それで、いつも二人  
だけだったそうだ。

俺の事は本当にたまたま知っていたただけだそうで、この木は

そんな二人の、大切な宝物の光景だそうだ。

俺はこの時まで、ずっと心のどこかでウジウジとしていた。

折角こうやって意識を取り戻し、傷とかも徐々に治ってきている  
のに、この二人のように、生きてるのが精一杯な子とかだってい  
るのに、俺はずっと燻っていたのかもしれない。

けれども、今は違う。

この木に、陸斗君と未来ちゃん。 今ここにあるこの光景を見てい

たら　なんか、そうやっていつまでもウジウジしているのが、馬鹿らしくなってきた。

あの時、俺は生きるチャンスを貰ったんだ。  
だからこそ

『二人とも、本当にありがとう』

やっと、生きる意味を見つけれれた。

大切な事が、少しだけ分かった気がした。

そうさせてくれたこの二人と、目の前の“奇跡”に

『本当に、ありがとう』

それから、数週間。

何度も言うが、今日俺は退院する事になったのだ。

「そうか……それで、この後はどうするつもりなんだ？」

「今から高校に寄って行きますよ。一応、この下には制服を着てますし」

主治医からそう聞かれ、俺は上着のコートを指差しながら答えた。  
その格好は、普通に普段着を着ているように見える。けれども、  
実はその下にはちゃんと制服を着ているのだ。

「とは言ってもなあ……もう、十時過ぎだぞ？　今から行っても……」

……

「いいんです、別に。それに」

確かに、今から学校に行っても何もなければかもしれない。

それでも、俺は

「それに？」

「……いえ、何でもないです。それじゃあ、長い間お世話になりました」

俺は、学校へ行く。

皆に元気な顔を見せるために。

何より……

兄ちゃん、元気出せよ！

私たちも頑張るから、あなたも頑張ってください！

この二人の言葉に、希望にしっかりと応えたいから。

Fin.

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8918r/>

---

けいおん！ Another Story SS

2011年3月24日23時55分発行